

国立循環器病センターに 労働組合もない 過労死110番に電話を

村上(父) ところが、循環器病センターには労働組合がないんですよ。

村上(母) 作ろうとした時期もあったようですが、結局無理だったようです。本来そこに労働組合があれば、すぐに駆け込みましたよ。なかったもので、過労死110番に電話したのです。その後約1年間かけて調査して、裁判に踏み切りました。弁護士の先生が、「医労連(大阪医療労働組合連合会)」を紹介してください。ここで初めて労働組合と出会いました。医労連の方々はこの事件を黙って見過ごしてしまえば、医療全体の大問題が解決しない」と立ち上がってください、裁判勝利の大きな原動力になりました。

村上(父) 判決は、原告に対して「遺族補償一時金を支払え」というもの。本言うと、国に謝ってほしかった。娘は仕事によって死んだんです。金銭ではなく誠意を見せてほしかったのです。しかし今まで民事で5連敗でしたから、6度目にしてようやく勝利判決。正直、本当に良かったと感じました。



国(厚労省)が運営する病院だからこそ、過労死などが起こらない勤務体制にすべきだが…

前田 確かに裁判所が理解してくれない「目に見えないしんどさ」があると思います。日勤務の後、深夜勤務に入るまで数時間しかない。なかなか眠れませんよ。亡くなられた当日も遅出勤務だったのでしょうか？

村上(母) 「娘が倒れた」という電話が私どもに入ってきたのは深夜1時半くらいでした。帰宅後すぐに倒れているのです。自宅マンションで薬を飲んだようですが、意識がなくなっていました。

村上(父) 娘はパソコンを通じて、

友人たちとメールのやり取りをしていたのです。亡くなる直前のメールには「とりあえず帰って来れました」「とにかく眠すぎる」など多くの「証拠」が残っていました。弁護士の先生も「このメールが証拠になる」とおっしゃっていました。私は茫然自失でした。「そんなに疲れていたのか」「どうして気づいてやれなかったんだろう」と。

村上(母) メールには時刻が残りますから、帰宅時間から逆算すると、病院での勤務は、おそらく月に80時間を越えているのです。

前田 しかしそれが書類に残らない。病院は予算が決められているので、残業をさせれば赤字になる。しかし仕事は定時には終わらない。それでサービスマン残業が日常化するのです。

20人の職場で、7人辞め 娘の負担も大きかった

村上(母) 普通の会社は予定が組めるじゃないですか。しかし看護の現場では、患者さんの家族から相談を受けたり、容態が悪化したり。突発的な仕事が入るので、予定はないですね。

前田 この事件を教訓に、病院側の業務改善はありましたか？

村上(母) タイムカードの導入は見送られているようです。娘

大阪地裁判決は夜勤の 過重性を認めたのが画期的

村上(母) 大阪地裁の判決は、夜勤の過重性を認めた点で、画期的です。この判決が確定したら過労死の認定基準も変わったでしょう。しかし国は控訴してきました。民事裁判では最高裁が国の過失を認めなかったため、国としては、とことん上まで持つていくつもりなのかもしれません。

裁判って、一般的に地裁より、高裁、最高裁とあがるにつれ、国に遠慮するでしょ。もともと民間病院と国立病院では裁判の基準が違うのです。国に不利な判決が出にくい。しかしなぜ被害家族が6年も7年も裁判をしななければならぬのでしょうか。

厚労省のお役人さんたちは、現場を知らずに控訴される。彼らは人事異動ですぐにどこかの部署に変わられるのかもしれないけど、私たちにとっては人生をかけた問題なのです。

前田 昨年は、消えた年金問題、C型肝炎の薬害問題など、ほかから厚労省の「無責任体質」が白日の下にさらされました。社会保険庁の職員も一生懸命がんばっておられるのですが、



予算が削られる中で、全国的に医師・看護師が不足している

トップの官僚と政治家が癒着して、大阪府でも救急医療の不足から患者さんが救急車でたらいまわしされる事件も起きています。高級官僚の天下りなどをやめさせて、その無駄に使っている税金を医療現場に回して、職員体制を充実させてほしいですね。

村上(父) この裁判で勝利することが、医療現場職員の体制を充実させ、市民の命を守ることにつながると思います。舞台は大阪高裁に移り、今年の6月17日から公判が始まります。

「看護師・村上優子さんの過労死認定・裁判を支援する会」では、国の不当な控訴に関して、棄却を求める署名に取り組みます。前回、大阪地裁には4万筆を超える署名を裁判所に提出し、それが勝利の呼び水となりました。

賛同署名は、医療関係者が 多く、他人事でない状況

村上(母) 署名してくれた人は、医療関係者が多かったのです。みんな他人事ではなかったのです。はないでしょうか。循環器病センターは吹田市にあります。地域の人々も安心して診察を受けられるような病院であってほしいと願っています。そのためには必要な部署には予算をつけて、

職員体制を整えていってほしいのです。

前田 大阪府では橋下知事になり、何もかも予算削減の雰囲気充滿していますが、人の命を守る現場こそ大事であって、無駄ではありません。

安心して暮らせる街を作っていくという意味でも、この裁判、なんとしても勝利してほしいと願っています。巨大な相手方を、もう一步のところまで追い込んでいきます。

国に過労死を認めさせて、二度と悲しい思いをされる方が出てこないように、そして患者の立場からも、職員の皆さんが元気に仕事を続けることができるように、私たちも全面的に支援していきたいと思っています。本日はどうもありがとうございます。



前田 博史さん

橋下知事で予算削減の動き 人の命を守る現場こそ大切